

「村上昭夫」を詩の世界に導いた先輩詩人

「動物哀歌」出版の生みの親の一人

高橋昭八朗氏よりのメッセージ

詩人村上昭夫生誕85周年記念実行委員会

委員長 高橋克彦様

参加者のみなさま

「村上昭夫展」フォーラム ことおろぎ忌

村上昭夫を語る パネルディスカッションと

詩の朗読会 ご盛会をお祈りいたします

高橋昭八郎

ぼくはかつて、詩人村上昭夫~~さん~~に思いを
はせ、つたない一文を幾度かつづつたことが

あり、これらのこともふくめてコラージュと
しての追想を~~昭夫さん~~に捧げたいと思います。

村上

~~まず~~、詩誌「歷程」124号(S.44.1)より引
用…。

「ふり返ってみると、昭和26年の夏、盛
岡市の郊外にある岩手サナトリウムでの出会
いから、もう17年という時間~~かな~~かかっている
のだった。

しかし、彼の仕事の大部分は昭和29年から

34年にかけてのおよそ5年間に集中していることがわかる。 23

佐伯郁郎、大坪孝二、大村孝子、中村俊亮、宮
静枝などの他のメンバーと交流するようになり、
また岩手日報紙上に新設された「日報文芸」への
意欲的な投稿をはじめたのである。「日報文芸」
の詩の選者は草野心平氏から村野四郎氏へと
ひきつがれていった。盛岡市の詩誌「L.A.」に
動物哀歌と題するシリーズを発表しはじめた
のは34年。この間、県詩人クラブの主催で
毎年ひらかれていた岩手詩祭には、詩劇の主
役をつとめるなど、彼は積極的な働きをみせ
ていた。大坪孝二を中心とした岩手県詩人クラブが

村上昭夫

集り
大坪
孝二

当時、盛岡に迎えた詩人には及川均、山本
太郎、秋谷豊、江間章子、長谷川龍生、木原
孝一、村野四郎、関根弘各氏がおおり、クラブ
のもっとも熱気と刺戟に充ちていた時期であ
った。この頃か、村上昭夫のいちばん元気だったと
きとふしきに重なっている。

ところで、ぼくが村上昭夫と出合ったのは、
1951年の夏、盛岡市郊外の岩手サナトリ

ウムである。詩を書いている人がいると紹介され、入院したばかりのほくがある日、彼の病室を訪ねたのであった。19人も一緒に大きな部屋で、彼がベットに上半身を起こし、ほくは側の椅子に腰をおろしての初対面…。このときのことなどは、思潮社発行の現代詩文庫『村上昭夫詩集』に「独り行く—村上昭夫くたのひかり」に書いてあるので、お読みいただければ幸いです。

~~以上が、引用文です。~~ なお、最後に高橋 6
克彦さまをはじめ、ここに、ご参会のみなごへ、村上昭夫の友人のひとりとして深く感謝いたします。
ありがとうございます。

ご挨拶の末尾に
なりますが、